

# トビウオ通信 (H26 第2号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

## 《平成25年(2013年)の島根県漁業の動向》

県の漁獲統計システムにより集計した県下漁業協同組合の漁獲統計資料(属人)などから、平成25年(1~12月)の島根県漁業の動向を取りまとめました(海面漁業・漁船漁業のみ)。

### 全体 … 漁獲量・生産額ともに前年より増加し、平年並み

平成25年の島根県(属人)の総漁獲量は14万トン(平年比110%)、総生産額は189億円(平年比96%)でした(表1、図1、2)。前年(平成24年)と比べると、総漁獲量で2万トンの増加、総生産額で4億3千万円の増加となりました。漁獲量の増加は、まき網漁業によるマイワシ、マアジの増加が大きな要因となっています。また、生産額の増加は、サバ類、ケンサキイカ、ベニズワイガニの減少分を、マイワシ、マアジ、ウルメイワシの増加分が上回った事によります。

漁業種類別でみると、本県の基幹漁業であるまき網漁業(生産額ベースで全体の45%)は1船団あたりの漁獲量は平年を上回り、生産額は平年並みでした。また、小型底びき網漁業1種(同10%)、沖合底びき網漁業2そう曳き(同10%)は1隻(船団)あたりの漁獲量、生産額ともに平年並みでした。沿岸漁業では定置網(同11%)は平年並みでしたが、イカ釣り(同4%)、釣り・延縄(同5%)は平年を下回る漁況でした(詳細については後述します)。

魚種別でみると(図3)、漁獲量の上位5魚種はマアジ(3万8千トン)、マイワシ(3万8千トン)、ウルメイワシ(1万3千トン)、ブリ(1万1千トン)、サバ類(9千トン)となりました。これらのうちマイワシ(漁獲量の平年比297%)は豊漁に恵まれ、ウルメイワシ(同139%)も平年を上回る漁況でしたが、マアジ(同119%)、ブリ(同84%)は平年並み、サバ類(同42%)は平年を下回りました。

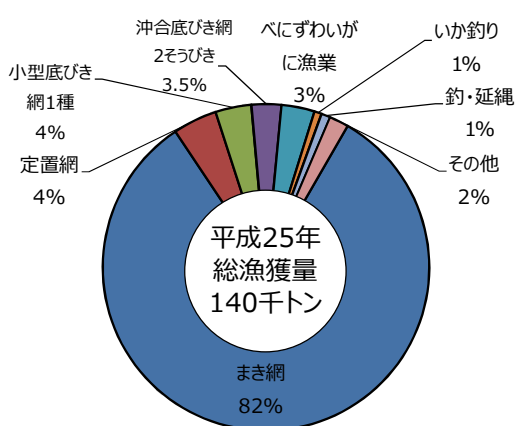


図1 平成25年の島根県の総漁獲量の漁業種類別内訳

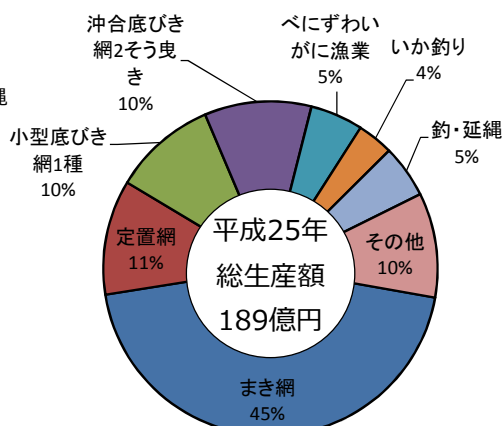


図2 平成25年の島根県の総生産額の漁業種類別内訳

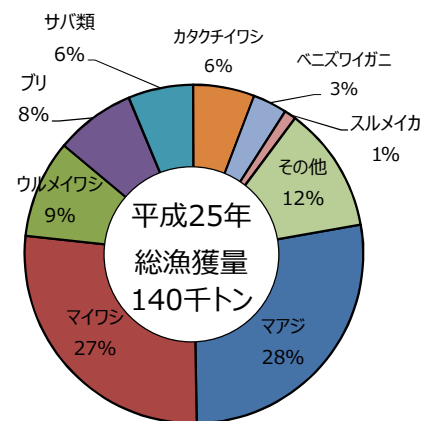


図3 平成25年の島根県の総漁獲量の魚種別内訳

#### ＜文中の語句説明＞

- ☞ 平成25年の漁獲量・生産額は県下全地区、全経営体を対象に集計していますが、平年比は一部経営体(実質的に県外を根拠にしているまき網船団と沖合底びき網漁船)を除いた数値で比較しています。
- ☞ 「前年」は平成24年の数値、「平年」は過去5年(平成20年~24年)、沖合底びき網漁業のみ過去10年(平成15年~24年)の平均値を指します。
- ☞ 平年との比較は、平年比120%以上は「平年を上回る」、平年比80~120%は「平年並み」、平年比80%以下は「平年を下回る」としています。

## まき網漁業 … 中型まき網 1 船団あたりの漁獲量は平年を上回り、生産額は平年並み

本県の基幹漁業の一つである「まき網漁業」には中型まき網や大中型まき網などがあります。これらは主にマアジ、サバ類、イワシ類などの浮魚（うきうお）を漁獲対象としています。

まき網漁業全体の平成 25 年の漁獲量は 11 万 5 千トンで島根県全体の 8 割を、生産額は 84 億 7 千万円で 5 割を占めました。このうち大半を占める中型まき網の漁獲量は 10 万 4 千トン（平年比 131%）、生産額は 70 億 6 千万円（同 128%）でした（図 4）。1 船団あたりの漁獲量は平年を上回り（同 121%）、生産額は平年並み（同 119%）でした。

中型まき網を対象に魚種別でみると、近年主力のマアジは、春漁は平年並みでしたが、秋漁が平年を上回り、漁獲量は 3 万 4 千トン（同 136%）でした。特に 9 月は当歳魚（2013 年生まれ）を主体に 1 万トンを超える漁獲がありました。近年資源の回復傾向が期待されるマイワシは、4 月と 10 月をピークに豊漁に恵まれ、漁獲量は 3 万 6 千トン（同 336%）でした。ウルメイワシは 11 月～12 月にまとまって、漁獲量は 1 万 3 千トン（同 155%）で平年を上回る漁況でした。一方、カタクチイワシは 3 月～4 月にまとまって漁獲され、漁獲量は 8 千トン（同 63%）、サバ類は 1 月、8 月、12 月に散発的に漁獲のピークがあり、漁獲量は 7 千トン（同 47%）で両魚種は低調に推移しました。

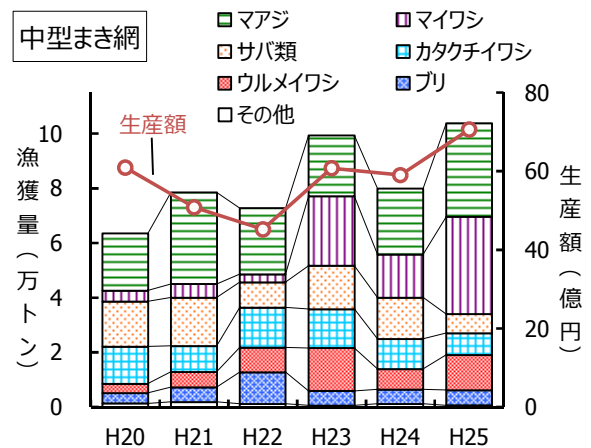


図 4 中型まき網による魚種別漁獲量および生産額の推移

## 沖合底びき網漁業 … 1 船団あたりの漁獲量・生産額はともに平年並み

沖合底びき網漁業（2 そう曳き）は 2 隻の漁船で網を曳き、カレイ類、アンコウ、アカムツ（地方名ノドグロ）など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象としています。平成 25 年の漁獲量は 4 千 1 百トン（平年比 76%）、生産額は 19 億 6 千万円（同 79%）でした（図 5）。本漁業の船団数は集計対象期間である平成 15 年以降で 11 船団から 7 船団に減りました。最近では平成 24 年に 1 船団が減少しています。同じ条件で比較するため 1 船団あたりでみると、漁獲量は 561 トン（平年比 95%）、生産額は 2 億 8 千万円（同 99%）でともに平年並みでした。長期的な動向をみると、量・金額ともほぼ横ばい傾向にあるといえます（図 6）。

魚種別の動向では、キダイ（平年比 145%）、アカムツ（同 147%）、マトウダイ（同 213%）は平年を上回り、ソウハチ（同 86%）、アナゴ・ハモ類（同 81%）、スルメイカ（同 88%）は平年並みでした。一方、ムシガレイ（同 60%）、アンコウ（60%）、アカガレイ（同 54%）、ケンサキイカ（同 55%）は平年を下回りました。

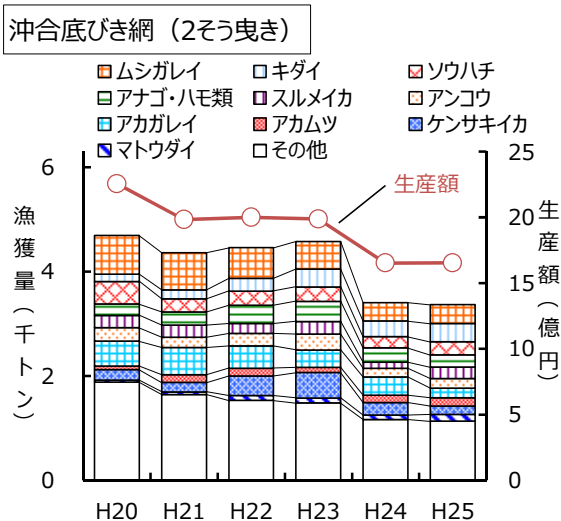


図 5 沖合底びき網漁業（2 そう曳き）による魚種別漁獲量および生産額の推移（一部経営体を除く）

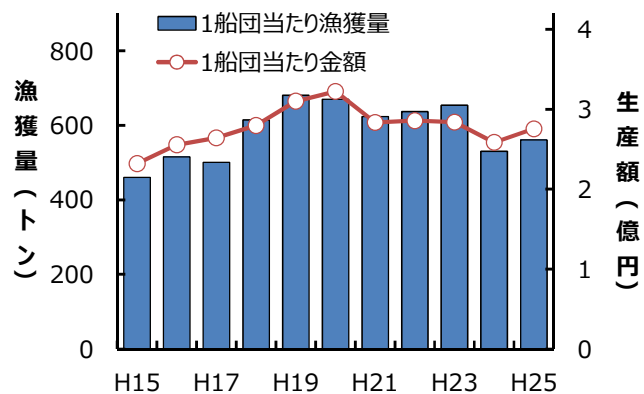


図 6 沖合底びき網（2 そう曳き）1 船団あたりの漁獲量・生産額の推移

## 小型底びき網漁業 1種 …… 1隻あたりの漁獲量・生産額ともに平年並み

小型底びき網漁業1種は、1隻の漁船で「かけまわし」と呼ばれる漁法で操業し、カレイ類、ニギス、タイ類など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象とします。平成25年の漁獲量は5千トン(平年比87%)で、生産額は19億円(平年比91%)でした(図7)。本漁業の操業隻数は廃業や減船により減少傾向にあり、平成18年以降で57隻から46隻まで減りました。同じ条件で比較するため1隻あたりでみると漁獲量は108トン(平年比101%)で、生産額は4千1百万円(同106%)で、ともに平年並みとなりました。

魚種別の動向では、アナゴ・ハモ類(同155%)、アカガレイ(同153%)が平年を上回り、ソウハチ(同103%)、アンコウ(同82%)、ヒレグロ(同86%)、キダイ(同88%)、マダラ(同115%)、アカムツ(同100%)が平年並みでした。一方、ニギス(同59%)、ムシガレイ(同69%)は平年を下回りました。なお、今期は前年(平成24年)と同様に、操業に支障をきたす大型クラゲの来遊が少なく、これと一緒に来遊すると言われるイボダイ(同5%)の漁獲は少なかったようです。

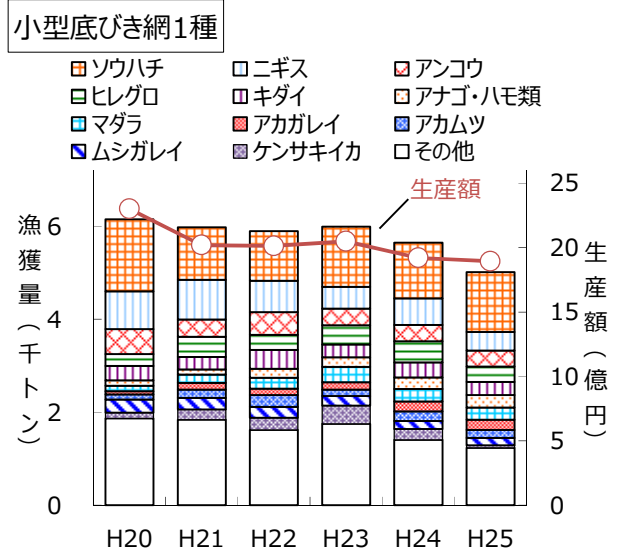


図7 小型底びき網漁業1種による魚種別漁獲量および生産額の推移

## 定置網漁業 …… 漁獲量・生産額ともに平年並み

定置網漁業(大型定置網・小型定置網・底建網)は魚類の通り道に網を張り、網に入り込んだものを漁獲する漁法で、マアジ、ブリ、サワラ類、イカ類などが漁獲対象となります。平成25年の漁獲量は6千1百トン(平年比104%)、生産額は21億円(同102%)で、ともに平年並みでした(図8)。また、定置網漁業の全漁獲量の約8割を占める大型定置網の1ヶ所あたりの漁獲量(同107%)、生産額(同106%)をみても、ともに平年並みでした。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区では主力のブリ(平年比95%)は平年並み、サワラ類(同165%)は平年を上回りましたが、マアジ(同72%)が平年を下回ったため、総漁獲量は平年並みに留まりました(同107%)。

石見地区ではサワラ類(同165%)、ケンサキイカ(同127%)は平年を上回りましたが、主力のマアジ(同111%)が平年並み、ブリ(同43%)が平年を下回る漁況であったため、総漁獲量は平年並みでした(同92%)。

隠岐地区では主力のマアジ(同114%)、ブリ(同110%)、スルメイカ(同90%)がいずれも平年並みであったため、総漁獲量も平年並みでした(同108%)。

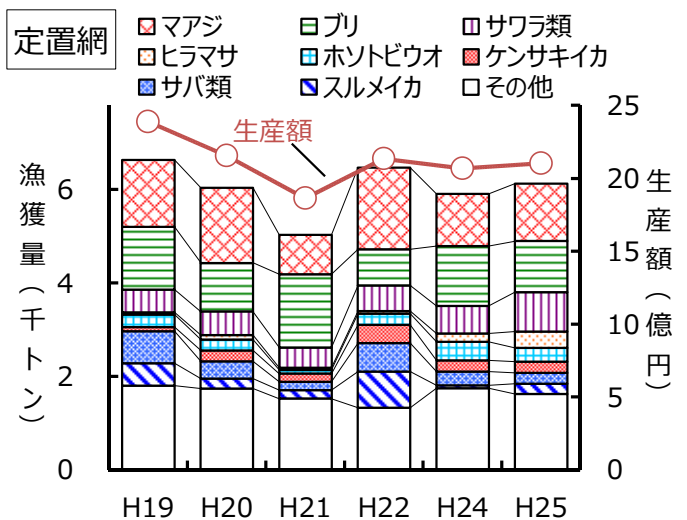


図8 定置網漁業による魚種別漁獲量および生産額の推移

## 釣り・延縄 …… 漁獲量は平年を下回り、生産額は平年並み

釣り・延縄は、海況や季節に応じて様々な仕掛けを駆使して魚を釣り上げる漁業です。

平成25年の漁獲量は1千2百トン（平年比77%）で平年を下回り、生産額は9億7千万円（同84%）で平年並みでした（図9）。長期的な傾向をみると、本漁業の漁獲量・生産額ともに漸減傾向にあります。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区では主力のブリ（平年比65%）は平年を下回り低調でしたが、サワラ類（同154%）が平年を上回り、総漁獲量（同83%）は平年並みとなりました。

石見地区では主要漁獲対象であるメダイ、ブリ、サワラ類、アマダイ、クロマグロ（ヨコワ）がいずれも平年を下回り、総漁獲量の15%を占めたヒラマサ（同195%）が平年を上回りましたが、総漁獲量（同66%）は平年を下回りました。

隠岐地区ではメダイ、カサゴ・メバル類、ブリ、マダイ、キダイ、クロマグロ（ヨコワ）が主な漁獲対象です。平成25年は、メダイは平年を下回りましたが、カサゴ・メバル類、ブリ、マダイは平年並み、クロマグロ（ヨコワ）が平年を上回って好調であったため、総漁獲量（同83%）は平年並みでした。

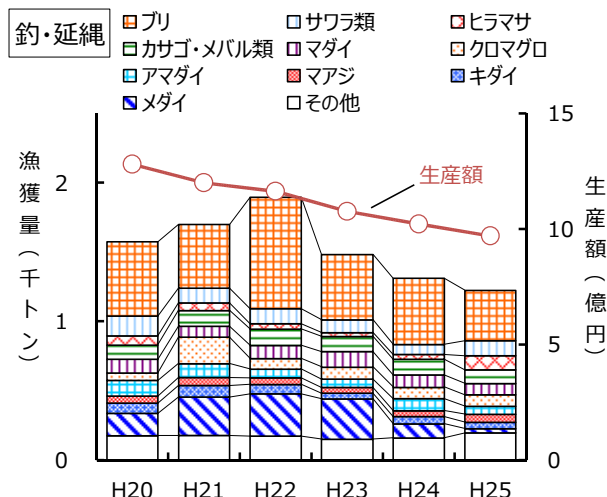


図9 釣り・延縄による魚種別漁獲量および生産額の推移

## イカ釣り …… スルメイカ、ケンサキイカともに不調

イカ釣り漁業は名前の示すとおりスルメイカやケンサキイカなどのイカ類が漁獲対象で、本県では夜に集魚灯（漁火）によりイカを集める夜釣りが主流です。また、漁船の総トン数により「イカ釣り5トン未満」「小型イカ釣り（5トン以上30トン未満）」「中型イカ釣り（30トン以上185トン未満）」に区別されます。

平成25年の漁獲量は1千1百トン（平年比66%）、生産額は6億6千万円（同74%）で、ともに平年を下回りました（図10）。魚種別でみると、スルメイカの漁獲量（330トン）は平年比57%で平年を下回りました。近年スルメイカの回遊経路が沖合寄りとなる傾向が強く、平成20年以降、山陰沖でのスルメイカ漁の不振が続いています。

一方、近年好調な漁況が続いていたケンサキイカは、秋季にまとまって漁獲されましたが、漁獲量は640トンで平年を下回りました（平年比68%）。ケンサキイカは平成18年以降、春～夏に獲れる大型のケンサキイカ型は減少傾向にあり、秋に獲れる小ぶりのブドウイカ型は増加傾向にありましたが、今後の資源・来遊動向に注視が必要です。

※ 各漁業の概要やトビウオ通信/バックナンバーについては島根県水産技術センターのホームページをご覧ください。（<http://www2.pref.shimane.lg.jp/suigi/>）

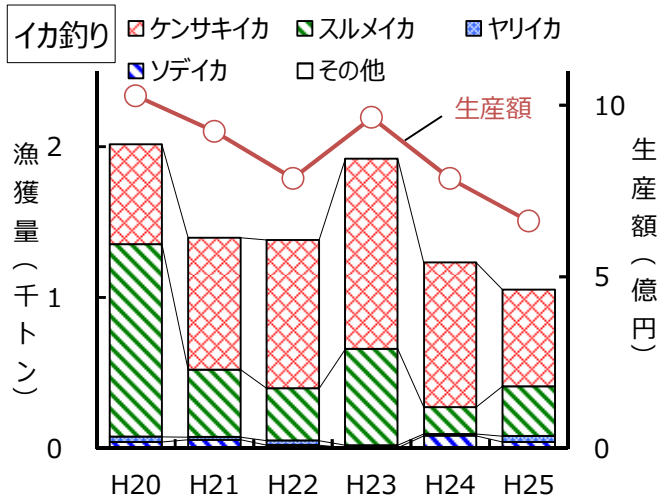


図10 イカ釣りによる魚種別漁獲量および生産額の推移

表1 平成 25 年の県内主要漁業の海区別漁獲量・生産額

漁業種類	海区	漁獲量※			生産金額※			1ヶ統あたり漁獲量※			1ヶ統あたり生産金額※		
		量(トン)	平年比	前年比	金額(百万円)	平年比	前年比	量(トン)	平年比	漁模様	金額(百万円)	平年比	漁模様
すべての漁船漁業	全県	139,614	110%	117%	18,933	96%	102%	—	—	—	—	—	—
中型まき網	石見	3,452	57%	97%	714	83%	93%	1,110	60%	▲	207	84%	○
	隠岐	100,991	138%	132%	6,343	136%	124%	11,221	123%	◎	705	122%	◎
小型底びき網1種	石見	4,539	88%	92%	1,707	94%	99%	108	101%	○	41	106%	○
沖合底びき網2そう曳き	出雲・石見	4,132	76%	99%	1,957	79%	100%	561	95%	○	276	99%	○
定置網 ※※	出雲	3,855	107%	109%	1,431	103%	105%	256	107%	○	98	106%	○
	石見	936	92%	113%	280	93%	116%	188	106%	○	56	110%	○
	隠岐	1,331	108%	98%	392	105%	105%	308	108%	○	94	105%	○
釣り・延縄	出雲	589	83%	93%	381	85%	92%	—	—	—	—	—	—
	石見	378	66%	85%	289	70%	77%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	257	83%	109%	300	105%	129%	—	—	—	—	—	—
イカ釣り	出雲	463	58%	95%	314	69%	102%	—	—	—	—	—	—
	石見	194	63%	76%	150	70%	74%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	394	82%	81%	198	88%	72%	—	—	—	—	—	—

※ 漁獲量・生産額は県内全漁協・全経営体が対象。平年比は実質的に県外を根拠にしている一部の経営体を除いた漁業協同組合 JF しまねおよび海士町漁協の数値を元に算出。

平年比：過去 5 年(H20～H24 年)の平均値との比較、沖合底びき網2そう曳きのみ過去 10 年(H15～24 年) 漁模様：◎が平年以上、○が平年並み、▲が平年以下

※※定置網の1ヶ統あたり漁獲量・生産金額は集計対象期間(H20～H25 年)に操業実績のある大型定置網のみを対象に算出。